

## 中津川と市民のドラマ

### サケの放流

『中津川』は、慶長14年の銘を刻む擬宝珠のある橋、城下町らしい風情、サケが遡上する豊かな自然、散歩など人々が行き交う心地よい生活空間として長く親しまれてきました。四季それぞれに趣ある眺めも楽しめるこの川は、盛岡の豊かな水資源の象徴であり、盛岡のまちの歴史・文化を感じる事ができます。

「昭和30年代には生活排水が流れ込んで、遊泳禁止にな

った時代もあるんです。」と教えてくれたのは「さけの赤ちゃん放流会」を毎年行っている本町振興会の事業部長、松本静毅さん。子ども時代はこの川でざっこ（魚）取りをして遊んだそうです。

サケは戦後、川べりでの陸軍の大演習や、鉾山の鉾毒水が北上川に流れたことなどから戻ってこなくなりました。「昭和49年ですよ、岩手日報の記者が産卵の現場を押さえたんです。スクープでした」と松本さんは当時の嬉しいニュースを振り返ります。それ

から市がサケの稚魚の放流を始め、それを盛岡市民の誰でも参加できるイベントにと振興会で始めたのが15年前のこと。今年3月に行われた放流会には300人程の参加者が集まりました。



(左上)川岸も護岸の上の道も、通勤・通学・散歩に広場として親しまれる。  
(上)社長を務める「カメラのキクヤ」では中津川を撮影会・写真教室で活用するという松本静毅さん。  
(右)これからさけの赤ちゃんをコップに入れて放流。

## 特集

### 中心市街地活性化を図る中津川スタイル

# 中津川と暮らす 中津川と遊ぶ

現在、盛岡市の『中心市街地活性化基本計画』で推進しているのが「まちなか観光」と「まちなか居住」です。空洞化が進む中心市街地に居住の魅力をプラスし、交流人口や居住人口の増加を図ることで、「元気なまち」を再生しようという計画です。また、当会議所を中心とした盛岡市中心市街地活性化協議会においては、盛岡市中心部に位置する中津川の活用を求める意見も出ています。盛岡の豊かな象徴とも言える中津川と歩む活動を通して、まちづくりを考えてみました。

「サケは放流すると4年後に帰ってきます。放流した子ども達が、この経験によってこの川を大事に、誇りに思い大人になってこの地域に帰ってきてくれるといいなと思っています」と松本さんが夢を語ってくれました。

### 「もりおか中津川の会」の多彩な活動

一方、盛岡商工会議所創立80周年記念事業で募集した論文が設立のきっかけとなった「もりおか中津川の会」。事務局の寺井良夫さんが、「中津川と県公会堂を活用した盛岡の活性化」で、会頭賞を受賞。その時賛同の声をあげていた人たちに声をかけ、内閣府から予算をもらい、中津川を生かすワークショップ、そして「もりおか中津川めぐみ感謝祭」を公会堂で開催するのが活動の始まり。その活動を続けようとNPO法人化し、現在会員は88名。

中津川の会の活動は多彩です。わすれな草保護用の木道を作ったり、中津川や橋を清



(上)街中にこの風情ある通り。  
 (中)橋の掃除はサイカチの実で。  
 (下)イベントで復活した染め物物流し。赤と紺は、「盛岡天満宮鎮座 石馬 手ぬぐい」

掃、ござ九の壁修復、小学生の野外学習で中津川の講義、他団体とともにイベント「どんどはれ中津川」開催、「中津川散策マップ」作成と19年度の活動だけでも単独、共催合わせて21事業にも及びます。

## 中津川の魅力

中津川の魅力を寺井さんに尋ねると「まず河原を歩くことができる」という答え。実はこれがそうそうないことなのだとか。そして川幅が50mくらいで大きさが手頃なこともポイント。自転車の中津川沿いを通勤している寺井さんは、徒歩に切り換えた時期があります。「前からよかつたけど、河原を歩くともっとよさが感じられる。それで思いが深くなった」と振り返ります。ちなみに好きなポイントは「あつた、富士見橋のマーガレットやコスモスも住民の人たちがきれいにしている。」上

流の新緑がいい、あの辺には秋にアユが集まって…と魅力の話はつきません。

目下の夢は「自立」して、専任のスタッフがいる事務局を中津川沿いに置くこと。その資金づくりに検討している一つが、ボランティアで刈り取る中津川に群生するツルヨシの活用。りんごの受粉で活躍するマメコバチが巣を作るので、このヨシを農家を買ってくれるのです。数々の思いがけないアイデアに、その源を伺うと「うちの会は魚に詳しい人、農業に詳しい人、学校の先生だった人など、いろいろな人がいますからね」と寺井さんはにっこり。

## 中津川の活用スタイル

中津川を生かすアイデアをお二人に尋ねてみました。「もっといろいろな植物が生えてほしい」と話すのは寺井さん。護岸目的の岸は土の層が薄く、昔と植生が変わりま

した。また中津川の景観の一等地にある大型バスなどの駐車場にも疑問を投げかけます。活性化イベントのためにトイレも必要。さらに市役所の2、3階あたりを市民や観光客がくつろげるよう開放することなどを提案してくれました。

松本さんは「中津川は生活に密着した感じが一番の魅力。親しまれているものを観光資源にすると、観光地としてはすごく奥深くなる。ほんとの意味で癒しになる」と、流行廃りのある造られた観光地より中津川の魅力が大きいことを強調。さらにかつての風物詩・



染工場の染め物物流しの復活や、酒蔵を中津川側から見学できるようになればいいなと、希望を語りました。

## 川のある風景をまちづくりで生かそう

都市計画では徒歩や自転車で行ける範囲でライフスタイルを構築する「コンパクトシティ」が注目されています。まちなかを流れる中津川の活用は他市との差別化の上でも重要なポイントでしょう。中津川は、景観としてのもとも

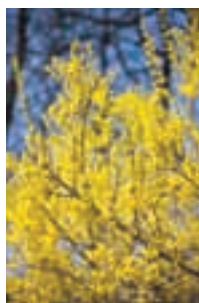
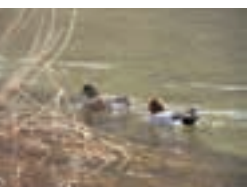
り、市民活動が根付いている場所として、盛岡に欠かせない場所です。中津川の自然・文化を生活の一部として大切にし、誇りに思う心。たとえ「川にゴミを捨てない」とか『川を歩こう』といったすぐにでもできる運動を市民

や企業が共同で行い、その輪を広げることも必要でしょう。そのような活動の中に地域活性化の基となる、「街と人」「人と人」を結びコミュニケーションも生まれます。求められるのは、川からの目線の発想であり、今ある資源をさらに生かすには、ござ九壁修復を中津川の会で行ったように、個人の財産を市民皆の財産としてフォローしていく視点も必要。

当所では、文字通り中心市街地活性化の「中心」として、中津川の魅力を活かしたソフト・ハードの取り組みを提案していくこととしています。中津川を愛する多くの会員、市民の皆さんからたくさんアイデアが生まれることが期待されます。

取材「S.A.N.S.A」企画編集委員会

(上)マメコバチの巣になるヨシの束。  
 (中)寺井良夫さんは、地域計画・都市計画のプロ。代表でもあります。  
 (左)中津川周辺の道。左下の小学校も選定。



■取材・写真協力  
 カメラのキクヤ : 019-623-8281  
 邑計画事務所(中津川の会事務局) : 019-653-1056  
 田口写真機店 : 019-652-2222